

丘美文二郎

— 『地球防衛軍』 『妖星ゴラス』 の探偵・SF作家 —

細川 涼 一

はじめに

丘美文二郎(本名・兼弘正厚。一九一八—二〇〇三)は、戦後の一九四九年から五八年にかけて、探偵小説雑誌『宝石』、『別冊宝石』を中心に活躍した探偵・SF作家である。

現在、丘美の経歴について指摘されていることは、大略以下のとおりである。⁽¹⁾

丘美文二郎は、本名・兼弘正厚。一九一八年十月三十一日大阪府生まれ。東京帝国大学工学部航空学科卒。戦後、進駐軍勤務を経て、自衛隊のパイロットになった。デビュー作は『宝石』百万円懸賞コンクールC級(短編)に入選した一九四九年十二月の「翡翠荘綺談」であり、続いて翌五〇年二月には、同コンクールB級(中編)に応募した「二十世紀の怪談」「勝部良平のメモ」が二作とも『別冊宝石』三巻一号「読切十六人選」で活字化された。丘美の探偵小説の特色として指摘されるのは、「佐門谷」(一九五二年)⁽³⁾や「汽車を招く少女」(一九五二年)⁽⁴⁾に代表されるように、怪談的要素を結末で科学的・合理的に説明することである。鮎川哲也は丘美の怪談の特色を端的に、「いままでの怪談はロマンチズムの産物のように思われていたが、氏は、科学的な手法と姿勢で怪談を書こうとした最初の人である」と述べている。⁽⁵⁾

生涯に著書を残さなかった丘美の名⁽⁶⁾が、探偵小説愛好家以外にも知られているとするなら、それは東宝SF特撮映画『地球防衛軍』⁽⁷⁾『宇宙大戦争』⁽⁸⁾『妖星ゴラス』⁽⁹⁾『宇宙大怪獣ドゴラ』⁽¹⁰⁾（監督はいずれも、本多猪四郎）の原作者としてであろう。

丘美については、探偵小説雑誌『幻影城』が一九七八年三月に「丘美丈二郎特集」を組み、SF長編「鉛の小函」を再録したほか、丘美の書き下ろしエッセイ「鉛の小函」の頃」と栗本薫の評論「27年後のタイム・カプセル―丘美丈二郎論」⁽¹¹⁾を掲載した。丘美についての纏まった作品論は、この栗本薫の「27年後のタイム・カプセル―丘美丈二郎論」⁽¹²⁾がほぼ唯一のものといっている。そこで本稿では、戦後初期の探偵作家であり、黎明期のSF作家ともいえる丘美丈二郎について、とくにその伝記に関する新知見もつけ加えながら言及することにしたい。

一 白嶺恭二の経歴は丘美丈二郎自身の経歴である

栗本薫⁽¹³⁾は丘美丈二郎の作品を、(1)「三角粉」⁽¹⁴⁾「耳飾りの女」⁽¹⁵⁾「種馬という男」⁽¹⁶⁾のように全くのミステリー仕立てのもの、(2)「鉛の小箱」⁽¹⁷⁾のように純粋なSFといつてよいもの、(3)「勝部良平のメモ」⁽¹⁸⁾「ヴァイラス」⁽¹⁹⁾のようにその中間に位置するSFミステリーというべきものの三つに分類している。しかし、丘美の探偵小説は理科学的な科学的解釈による事件の解決が多く、結末で科学的な解説が入らない探偵小説は、自殺を他殺であるように見せかける「耳飾りの女」があるだけといっているほどである。その意味では、丘美の探偵小説は、ほぼその全てが栗本の分類にいうSFミステリーであるといえよう。

丘美の探偵小説で多く探偵役をつとめるのは、白嶺恭二と神志山直の二人である。白嶺恭二が登場するのが、

「二十世紀の怪談」「鉛の小函」「空坊主事件」⁽²¹⁾「龍神吼えの怪」「波」⁽²³⁾、神志山直が探偵役をつとめるのが、「三角粉」「ヴァイラス」「パチンコと沈丁花」⁽²⁴⁾「ワルドシュタインの呪い」(「ワルドシュタインの呪い」では、神志山の名前は神志山醇になっている)⁽²⁵⁾であり、「恐怖の石塊」⁽²⁶⁾には白嶺恭二と神志山直が二人とも登場する。

二人のうち、神志山直は「戦後の流行の波にのつて実録物を二三書いて名を売った男、だが本職は私立探偵、さういつた油断のならぬ種類の男」(「三角粉」)とも、「夜間学校で教鞭をとりながら、ときに探偵のような仕事も内職にする」男(「パチンコと沈丁花」)とも説明されている。明智小五郎や金田一耕助の系譜に連なる名探偵型の探偵である。ここで、作者である丘美の経歴との関係で注目したいのは、もう一人の白嶺恭二である。

白嶺恭二について、白嶺が初登場する「二十世紀の怪談」では、戦時中、「私(二十世紀の怪談)の話者―引用者」の工場(川西航空機会社の下請けとして、油圧操作装置の部品を製作していた兵庫県の某軍需工場―引用者)に、海軍監督庁より派遣された技術大尉であり、白哲長身の美丈夫で、戦闘機の操縦士でもあったとして、次のようにその経歴が説明されている。「彼には軍人に付き物の肩を切る風がなく一個の技術者として極めて協力的に且つ良心的に事態を処理しようといった態度であつた」。その後、白嶺は九州南端の航空基地に出張し、現地修理班の一員として活躍していたが、終戦間際に本拠の横須賀航空基地に連絡に帰り、そこで終戦を迎えた。「技術者であり操縦士でもある両刀使ひの彼だが、都合によつて終戦前は技術者としてその仕事一本に従事してゐた為に何とか命があつたのだといふ」。横須賀航空基地は、占領軍の先達である米軍第五海兵隊が進駐軍最初の上陸を印した場所で、「白嶺を始め在留した技術者の一行は急造の終戦連絡事務所に籠詰めになり、その後三ヶ月に亘り終戦折衝の事務に忙殺され殆んど眠る暇もなかつたといふ。翌年早々やつと解放され京浜地方にある某工場に技術者として入社した。当時を回顧して彼は云ふ。終戦を耳にしたとき死すべきか生きるべきかは彼にも一時、切実な迷ひであつた。だが彼はダンピラを振り廻す戦闘軍人ではない。無責任な自決を

選ぶわけにゆかぬ。飛ぶ鳥はあとを濁さず、せめて技術者としての残された最後の責任を果すまではと終戦事務の処理に協力したのだが間もなく始つたのがあの浅ましいどさくさと物慾地獄の絵巻物であつた。

一方、「鉛の小函」では、「白嶺の往歴は錚々たるエンヂニアで戦時中は海軍に在職し技術者パイロットとしての華やかな体験を持つ異才なのであるが、時に利あらず、戦後の不安定な境遇のせいか生来の茫莫たる風貌に尚ほ磨きが掛つて、今では完全にデイレットタンチズムに生きるさすらいの男といった印象が濃厚である」
「旧日本海軍でテストパイロットの要職を経た老練の士」と紹介されている。

丘美は、エッセイ「『鉛の小函』の頃」⁽²⁷⁾で、敗戦時、「私のように社会に出たがまだ日の浅い人や、出る間際にあつた人達は、人生経験の第一歩で、敗戦という減多に体験できない世相にいきなり出くわした特殊な世代である」と述べているが、戦時中の丘美自身については語ることはない。東宝SF特撮映画シリーズVOL・5『キングコング対ゴジラ／地球防衛軍』に掲載された丘美丈二郎インタビュー⁽²⁸⁾の年譜に、「大正7年10月31日、大阪生まれ。東京大学工学部航空学科を卒業。海軍に技術士官として入り、補給・調達関係に所属しながら、航空機の設計をする。技術者も実際に操縦の経験が必要だという海軍省の意向で飛行訓練を受ける」とあるのが、戦時中の丘美の消息を伝えるこれまでの唯一のものである。

しかし、碓義朗の『幻の戦闘機「零戦」後の陸海軍機の開発秘録』には、海軍のエンテ型(先尾翼型式)高速戦闘機「震電」を試作したエンヂニア・パイロットの鶴野正敬技術大尉(はじめ造兵大尉。一九四二年に造兵・造機あわせて技術大尉に呼称が変わった)をめぐる、次のような記述がある。⁽²⁹⁾

貴重な技術者をひとりでもおおく確保しよう、と陸海軍は大学および専門学校の工科系学生をきそつてとり、軍服をきせて技術士官とした。海軍では、その技術士官に、さらに飛行機操縦を習得させることに
より、設計者としての能力をたかめようとした(中略)。設計者はパイロットのことを聞いて、それを

分析し自分の設計にフィードバックするのだが、完全な意志の疎通というのはむずかしく、たがいにイライラすることも生じる。しかし、設計者がパイロットであれば、そういうなやみは解決する。そこで、昭和十六年に海軍は航空本部技術部長・多田力三機関少将(のち中将)の提案で、飛行機の設計に従事する技術士官の一部に、操縦教育が実施されることになった。この制度により昭和十六年度が鶴野正敬(戦闘機)、安田忠雄(水上機)両造兵大尉、十七年度が兼弘正厚(戦闘機)、奥平緑郎(攻撃機)両技術大尉、十八年度が加藤正明(水上機)技術大尉の、あわせて五名のエンジニア・パイロットが生まれた。

すなわち、丘美丈二郎(本名・兼弘正厚)は、震電の設計者である鶴野正敬に次ぐ、海軍が正規に養成した戦闘機のエンジニア(技術者)・パイロット第二号だったのである。鶴野は一九四三年、「震電」試作に先立つて海軍航空技術廠(空技廠)で「震電」そっくりのモーター・グライダーを作り、木更津でテスト飛行を行ったが、「九七艦攻に曳航されて空中にあがった」「震電」グライダーは、高度五〇〇メートルで離脱すると自力で飛行した。操縦は、もちろん鶴野自身、そして曳航の九七式艦上攻撃機を操縦するのは、鶴野の大学(東京帝国大学工学部航空学科)引用者)後輩で、これも一年あとのエンジニア・パイロットである兼弘正厚技術大尉だったという。

以上の碓義朗の震電をめぐる記述に鑑みるなら、「海軍監督庁(空技廠)引用者)より派遣された白嶺技術大尉(中略)は戦闘機の操縦士でもあつた」「二十世紀の怪談」、「錚々たるエンヂニアで戦時中は海軍に在職し技術者パイロットとしての華やかな体験を持つ異才」、「鉛の小函」という、丘美の小説に登場する白嶺恭二の経歴は、作者である丘美自身の経歴を敷衍したものと考えていいのである。

戦時中の一九四二年(昭和十七)十一月―四三年一月の霞ヶ浦海軍航空隊を舞台とした「空坊主事件」は、「白嶺が旧日本海軍の数ある技術将校の中から選出され、戦斗将校の卵である若い士官達と一緒に、飛行機の操縦

訓練を受けた頃に起つた奇妙な事件の実録」とされているが、霞ヶ浦の水郷の描写が秀逸であり、丘美自身が霞ヶ浦航空隊で操縦訓練を受けたことも確実である。

「二十世紀の怪談」で白嶺は、横須賀の終戦連絡事務所にいた時、米軍のATIIG（航空技術情報団）から日本の陸海軍が有した航空技術に関する資料の提出を命じられたとして、「海軍の爆撃機は速力と高々度性能でB―二九より一段と優れてゐたし局地戦闘機に至つてはその頃全世界に類を見ない強力なものだつたんだ。然しどれも試作の域を出てゐない。技術とは物を実用化することであつて、一つ二つばぬけた物があつても平均水準を高めることにならない。終戦時残つてゐた飛行機は全部破壊されたのだが、之等の試作機は母艦に積んで大切に米国に持去られた」と述懐しているが、ここにいる海軍の局地戦闘機は、丘美自身が試作のグライダーを曳航した震電を指すのである。

東京帝国大学工学部航空学科を卒業して、飛行機の設計技術者になつたという丘美（兼弘）の経歴は、海軍のエンジニア・パイロット第一号である鶴野正敬の後輩に当ただけでなく、学年は離れているが零戦の設計者として、宮崎駿監督の『風立ちぬ』⁽³⁰⁾の主人公にもなつた、堀越二郎⁽³¹⁾の後輩にも当たることになる。

ところで、一九三八年四月に東京帝国大学工学部航空学科に入学する以前の丘美（兼弘）について、新知見をつけ加えたい。京都大学教授の福井謙一が一九八一年十二月にノーベル化学賞を受賞した際、『化学』一九八二年一月号が受賞を祝福する特集を組み、「福井謙一君 おめでとう！―中学・高校・大学の同窓生が語る」として、福井の同窓生三人によるエッセイを掲載している。その中に、「元航空自衛官。現在、技術翻訳士（自営）の兼弘正厚による「ものすごい探求心を秘めたジェントルマン」という一文がある。⁽³²⁾このエッセイで兼弘、すなわち丘美は、「ノーベル賞の由来は、化学者ノーベルが発明したきわめて人間臭い目的の工業化学製品が本来の意図に反して予期せぬ方面に使用されはじめた贖罪のため設けられたときいています。（中略）現に

人類は原子爆弾が実現する以前、日本人にとっては広島や長崎に大変な一発を食うまでは、その道の専門家以外は顧みようともしなかった原子物理や原子化学を今日ではほとんどの人類が、ことに日本人は話題にのせます。この時点ですら福井君の理論の真意は専門家以外にはまだまだまだ吸収しがたい奥の段階にあるのです。(中略)見方によっては驚くべき反主流的な闘志です。このすさまじさを福井君はどこで獲得したのでしょいか。

中学校から高等学校にかけ、彼の身近にいた私には、やはり高等学校と結論できそうです」と述べている。

福井謙一は丘美と同じ一九一八年(大正七)の生まれ。一九三五年(昭和十)に旧制大阪府立今宮中学校四修、一九三八年(昭和十三)に旧制大阪高等学校を卒業しているから、丘美も福井の同級生として、大阪府立今宮中学校・大阪高等学校を卒業したと考えていいのである。なお、ここで丘美がノーベルの贖罪との関係で原子爆弾に言及しているのは、後述するように「鉛の小函」で原子力の危険を説いた丘美の面目躍如たる文章といえよう。

二 丘美丈二郎の探偵小説・SF論

丘美丈二郎は職業作家にならなかったため、趣味的な余技作家に数えられる。しかし、『探偵趣味』十一号の巻頭言で、「趣味」とは人生の余技だと云った人がおります。それなら人生の本技とは何だ? と反問しましょう。この人の曰くは、生計の資を得る仕事の本技で最も大切なつとめであり、それ以外は皆つけたしの余技だという意味らしいです。この考えは明らかに逆立ちしているようですね。生計の手段、即ち生存の理由である奴隷という特殊な人種を除けば——。「趣味」とは十人十色ではあるが各々の人生にとつてはもつと意味のある重要なものです。趣味は手段ではなく目的の一種です」と述べたように、⁽³³⁾丘美は戦後の探偵作家の中で

も、明確な目的意識を持つて探偵小説を執筆した稀有な存在である。

丘美が探偵小説を執筆するに当たって目的としたのは、科学的合理性・科学的精神の啓蒙普及であった。たとえば、「勝部良平のメモ」では、「筆者の趣味として、探偵小説の本当の興味はむしろ文学を解脱した論理性乃至は科学的合理性にあるとさへ感じてゐる。そんなものを探偵小説とは呼べぬとならば推理文でも推理論説とも適当な名前を付ければよい」と述べている。評論「探小に於けるセクシヨナリズムと立場の調整統一」では、探偵小説における理科的興味と文科的興味の対立をめぐって、「探小(探偵小説―引用者)に含まれた謎と面白味の大半は理科的面白さである」とまで断言する⁽³⁴⁾。こうして丘美は、評論「論文派の誕生」で、自らの理科的探偵小説の立場を論文派と定義し、「『中心テーマの学問的意味と価値を世に紹介し翹え且つ啓蒙するのを主眼とする』即ち手取り早く言えば、論文を小説的な形式で表現したもの」とすら述べるのである⁽³⁵⁾。

丘美が探偵小説に理科的な科学的意識の普及を託したことの背後にあるのは、戦時中の職業軍人が科学的合理性を重んじる技術者を待遇し、精神至上主義を鼓吹した結果の惨めな敗戦と、占領下にあった戦後日本の政治家や役人の腐敗・保身への憤りであった。前者については、「二十世紀の怪談」に散見して見出せるが、後者については、「お茶屋で馬鹿酒をのんで助平面をテラ〜と怪気焰をあげる様な非科学的な野卑な雰囲気は純正理論を愛好する科学的な人間の精神とは本質的に相容れぬ」と、当世の「政治屋」の野卑なハツタリを厳しく批判する「探偵小説と政治屋」のような評論もある⁽³⁶⁾。

そして、「鉛の小函」を執筆した動機として、後年、「その頃、私の食うための職業は、いわゆる進駐軍勤めで、しかも行く先が、ミリタリー・ガバメント(軍政府)という米軍付属のお役所であったため(進駐軍大阪軍政府に勤務―引用者)、占領軍の方針や思想がよくわかる一方、応対する日本政府側の動きもよくわかる立場にあった。(中略)我慢できないのが日本のお役人のムードであった。日本全体のためという意識でなく、応対して

いる自分個人と自分達のグループの保身を第一にという色の濃いのが目について仕方がない。又、お役人も、まじめ一本では食って行けない世情の影響もあって、いつの世でも官公吏にはつきものの汚職的な動きが、半ば習慣的に公然とまかり通る世の中であった。若くて、あまり融通のきかない私は、怒りの向け先に困ったものである。このような諸々のストレスのはけ口として、——『小説の形を借りて、世間にぶつけてやる』——という強い発意が動機になって書いたのが、今回紹介された、「鉛の小函」である。私の好きな科学小説の形態をとっているが、執筆の動機は政治に対する若者の憤りで、内容や筋書きにも三十年ほど前の私の気持ち³⁷が随所に現れている」と回顧して述べている（『鉛の小函』の頃）。すなわち、占領下の日本政府の政治家と役人への憤りが最も横溢しているのが、丘美のSFの代表作、「鉛の小函」であった。

本章の最後に、丘美のSFについての立場を述べておきたい。丘美は、評論「S・Fの二つの行き方」³⁷でSF（空想科学小説）を二つの種類に分類する。一つは、幻想科学小説であり、もう一つは科学予想小説である。丘美によれば、前者が物理学を無視した空想を繰り広げ、文学的な立場だけが幻想科学小説のお伽噺的興味を評価し得るのに対して、後者は科学が主題、文学が小道具となり、将来に予見し得る科学的事実を説明しているものである。丘美のSFの立場が、後者の科学予想小説にあることはいうまでもない。

さらに、東宝SF特撮映画シリーズVOL・5『キングコング対ゴジラ／地球防衛軍』のインタビューでは、丘美は「私のはSF——サイエンティック・フィクションではない。私のはSS——サイエンティック・ストーリーである。あるサイエンスが有りましたね。それを外挿しますと、この時点でこうなるんだという、科学的根拠をもった考えたものであるという事ですね。おとぎ話のように頭に浮かんだことを空想するなら誰だってできるんです。現状から判断して、近い将来はこうなり得るということを外挿法で描いて、ポヤポヤしたたら危ないぞということを警告しようと思っただけです」と述べている。すなわち、丘美は自らのSFを、

幻想性を排した科学予想小説、サイエンティック・ストーリーと規定するのである。

三 「鉛の小函」と原子力利用への警鐘

丘美のSFの代表作である長編「鉛の小函」は、一九五三年七月発行の『宝石増刊』八巻八号に掲載された。ただし、東宝SF特撮映画シリーズVOL・5『キングコング対ゴジラ／地球防衛軍』の丘美丈二郎インタビューによれば、「鉛の小函」は『宝石』百万円懸賞コンクールのA級部門（長編。二〇〇枚に応募しようとして書き「鉛の小函」の枚数は三二〇枚）、締切に間に合わなかったけれども出したというから、執筆の時期は同コンクールB級（中編）に応募した「勝部良平のメモ」⁽³⁸⁾、「二十世紀の怪談」、C級（短編）に応募したデビュー作「翡翠荘綺談」と同じく一九四九年―五〇年初頭までさかのぼることになる（作中、「鉛の小函」の年代は一九五〇年に設定されている）。長い間放っておかれたが、一九五三年当時の『宝石』編集長の永瀬三吾が原稿を見つけて面白く思い、『宝石増刊』に掲載に至ったという。

「鉛の小函」は、技術者パイロットとしての経歴を買われた白嶺恭二が、アイゼンドルフ博士を艇長とし、各国人から編成された宇宙艇の主操縦士に迎えられ、月から火星に向かう宇宙旅行に行く話である。アイゼンドルフ博士の宇宙旅行の主目的は、火星と木星の間にある小惑星の放射能の調査であった。

丘美がアイゼンドルフ博士をして語らせた小惑星の話に入る前に、まず野尻抱影の説明に依拠して、小惑星に関する概略を述べておきたい。すなわち、惑星が太陽と離れている距離には一定の比例があるのに、火星と木星の間は空きすぎている。そこで、その間にもう一つ惑星が挟まっただけだと昔から考えられていた。ところが、十九世紀を迎えた元日の夜に、イタリアのピアッジという天文学者が、地中海のシチリア島で

火星と木星の間に位置する直径七七〇キロの惑星を見つけ、ケレスと名づけた。続いて第二のパス（直径四九〇キロ）、第三のジュノー（直径一九〇キロ）、第四のベスタ（直径三九〇キロ）が発見され、どれも小さいのでプラネトイド（小惑星）と総称することになった。その後もぞくぞくと発見され、今では軌道の知れているだけでも千五百以上にものぼっている。学者の中には、こういう小惑星はもと一つの惑星だったものが、木星の引力のためにバラバラに砕けたものだろうと考えている人もいる、というのが小惑星をめぐる概略である。

丘美は、作中人物のアイゼンドルフ博士をして、火星と木星の間にあった惑星がバラバラに粉碎して小惑星になった原因を、この惑星の上に住んだ高等生物が原子力兵器を使用した誤りによるものとして、次のように説明する。

「儂は何故小惑星という特別な天体だけが放射能を示し普通の大遊星惑星―引用者にはこれが無いのかをいろいろと考えてみたわけじやが、あらゆる可能な説明から取捨選択してある戦慄すべき結論を得ましたのじや。（中略）火星軌道と木星軌道との中間即ち太陽より約四天文単位の距離に嘗て一つの大遊星があつたことを断言し得るのです。その質量は地球と同じか或は若干大きい程度であつた筈です―小惑星とは要するにこの遊星が大爆発を起し木破微塵に粉碎されたものですのじや。それも、自然の爆発ではな―嘗てその遊星の上に住んだと考えられる高等動物が不用意にも原子力の使用を誤つたのじや（中略）下手をするとこれが地球の近い将来の姿を暗示しているとも言えましようぞ」

アイゼンドルフ博士の発言を受け、白嶺が書いた手記の形で、丘美は次のような文章を綴っているが、これは「鉛の小函」の中でも最も高揚した一文である。

ああ、君達（日本国民―引用者）は生きた人間の頭上に加えられた原子力という人類の歴史に嘗てない異常の経験を持つ人達である。卿等（日本国民―引用者）は人類平和の一員たんとする限り、最も強力にその点

を主張し人類の愚行を阻止する立場と権利を有する筈だ。愚行！ 愚行！ 又となき愚行！ 愚行の果には木破微塵になつた地球が平山清次の説く族の理論に従つて数知れぬ小惑星の群となり、永遠に地球人類の愚行の証拠を残すだろう。この恐ろしくも厳肅なる事実が起らぬ前に、君達こそこれを止める第一人者とやらねばならぬ。君達の上を統治する腰抜け政府が相も変らぬ馬鹿言をほざくなら、世界人類の為にそんなものは叩き潰すべきである。我等の俊英ドニヤツクは言つた「奴等は決して君達の指導者ではない筈だ、君達が選挙権を行使して選んだ君達の使用人だ。役に立たぬ使用人を誡首するに何の遠慮がいらう」

丘美は先に引用した福井謙一のノーベル化学賞受賞を祝う『化学』の文章、あるいは「鉛の小函」の頃の「(日本政府の占領軍に対する態度が―引用者)あまりにも卑屈すぎるように思われ、原爆を喰わされた相手にそこまでへり下る必要はあるまい、と叫びたい気持で一杯であった」といった回想に見られるように、たびたび広島・長崎の原子爆弾投下に触れている。「鉛の小函」のこの文章は、その丘美の原点ともいえるべき、原爆を投下された日本国民の立場から、人類の原子力利用の危険に警鐘を鳴らす言葉だといえよう。ことに「鉛の小函」には、当時の国際政治を反映して、米ソの対峙が「向うみずな」原子戦に入ることをいかに回避するか、という問題意識が横溢している。

「鉛の小函」の発表は、一九五二年四月にGHQが廃止され、対日平和・日米安保両条約が発効されて日本が独立を回復して以降の一九五三年七月であるが、執筆の時期は占領下にあつた一九四九年―五〇年初頭にまでさかのぼる。独立回復後に発行された『アサヒグラフ』一九五二年八月六日号⁴⁰が、広島・長崎の原爆被害写真をはじめて公開したのは、GHQの検閲がなくなったことによるものである。その『アサヒグラフ』で原爆被害が具体的に国民に知らされたのに先立ち、丘美が被爆国の国民の立場・権利として原子力兵器の利用に対する危険を警告する小説を書いたことは、注目すべき事実であろう。

ところで、「鉛の小函」で原子力兵器による戦争の危険を説き、インターナショナルな立場に立った丘美が、一九五四年に発足した航空自衛隊に入隊したことについても、触れておかなければならない。

東宝SF特撮映画シリーズVOL・5『キングコング対ゴジラ／地球防衛軍』に掲載された丘美丈二郎インタビューの年譜では、進駐軍大阪軍政府に勤務したのちの丘美の戦後の経歴が、次のように述べられている。

松下電器に一時入社、東洋航空等を経て、自衛隊の創設と共に「ジェット機に乗りたい一心で」昭和30年代初頭、航空自衛隊に入隊。以後、一貫してテスト・パイロットとして実験航空隊に所属。仙台、浜松から岐阜と転々とする。43年に自衛隊をやめ、コンピュータのソフト関係でシミュレーションの仕事に携わったり、民間の整備テスト・パイロットをしたが、50年に操縦の仕事を離れる。現在は、技術関係の翻訳に従事。

「鉛の小函」で白嶺は、「もう一度飛行機の技術に戻りたい——これが俺の見果てぬ夢であった。飛行機は既に二十世紀の交通機関である。世の進展に伴う必需性は人為的制限をいずれば打破り、日本が交通機関としての航空機を生産し使用するのを自他共に承認させる時期はいつかは来るだろう（アメリカの占領政策によって、日本の航空活動は禁止されていた―引用者）⁽⁴¹⁾。だがそれに先立つて何とかその技術に接近するには？ 米軍に職を求めたのもその方面に僥倖を狙う気持が多分にあつたわけだ」と述懐しているが、この白嶺の述懐は、発足した航空自衛隊に「ジェット機に乗りたい一心で」入隊することになる丘美の述懐そのものであったといえよう。

丘美と同年の生まれである堀田善衛は、一九五一年に「広場の孤独」という小説を発表した⁽⁴²⁾。一切の政治的支配力から精神的に自由でありたいと思う主人公（堀田自身が寓意されている）は、しかし敗戦後の占領という事態の中で、日本は「クレムリンの広場」と「ワシントンの広場」に象徴される国際政治の中に組み込まれ、日本人は否応なしに何らかの意味で政治に対するコミットメントを強制される存在であることを意識して悩む。

そして、そのことを「広場の孤独」という題名の小説に書こうとする話である。「広場の孤独」の最後は、次のような一文で結ばれている。

木垣(主人公の名引用者)はぶるつと頭を振って再び空を仰いだ。星々はいつの間にか消えてしまつて、空はいつものように暗かった。光りは、クレムリンの広場とかワシントンの広場とか、そういうところだけ、虚しいほどに煌々と輝いているように思われた。そして彼はそこにもき出しになつていて自分を感ぜた。生れてはじめて、彼は祈つた。レンズの焦点をひきしほるような気持で先ず書いた。／広場の孤独／と。

後年、アジア・アフリカ作家会議の世話人となり、ベトナムに平和を、の市民集会の呼びかけ人となつた堀田善衛と、航空自衛隊に入隊した丘美丈二郎の立場は、百八十度異なるようにも見える。しかし、「クレムリンの広場」と「ワシントンの広場」の対立に象徴される国際政治の中で、占領下の日本国民がどのように政治的主体性を回復し、国際社会にコミットメントしていくのかという課題は、案外堀田と丘美に共通したものであつたのではなからうか。ちなみに、丘美が東宝SF特撮映画の原作者になつたように、堀田善衛も中村真一郎・福永武彦とともに、東宝SF特撮映画『モスラ』(一九六一年七月三十日封切。丘美原作の『宇宙大戦争』と『妖星ゴラス』に挟まれる時期の封切である)の原作者になるのである。⁴³⁾

四 『地球防衛軍』『妖星ゴラス』と「鉛の小函」

私の手許に、古書肆を通じて入手した、丘美丈二郎の渡辺啓助宛の書簡(はがき)が二通ある。一九五八年のものである。次にそれを紹介しよう。⁴⁴⁾

○丘美丈二郎書簡 渡辺啓助宛(はがき。昭和三十三年三月十九日岐阜局消印)岐阜市殿町三七相葉荘より
拝復

原稿料御送金旨、確かに入手いたしました。御禮申し上げます。

御忙しいところをわざわざ御取立て下されまして有難うございました。

目下期日の迫った東宝の次期科学映画原作に四苦八苦の態です。

草々

○丘美丈二郎書簡 渡辺啓助宛(はがき。昭和三十三年六月二日那加局消印)

住所変更の件

左記の通り変更しました。

よろしく御願ひ致します。

岐阜県稲葉郡那加町桜町一ノ三

丘美丈二郎

丘美原作の東宝SF特撮映画第一作『地球防衛軍』の封切は前年の一九五七年十二月二十八日であるが、その構想に三年越し、製作準備に八ヶ月、製作日数に一二〇日を要したという⁽⁴⁵⁾ことであるから、これは⁽⁴⁶⁾がきで丘美が「期日の迫った東宝の次期科学映画原作に四苦八苦の態」と述べた東宝SF特撮映画は、第二作の『宇宙大戦争』であろう。

東宝SF特撮映画シリーズVOL・5『キングコング対ゴジラ／地球防衛軍』の丘美丈二郎インタビューによれば、『宝石増刊』に載った「鉛の小函」が東宝製作部長の田中友幸の目に止まり、丘美を航空自衛隊の仙台基地まで訪ね、『地球防衛軍』原作の依頼があったという。『地球防衛軍』は第一回目ということで、田中の

要請もあつて雑誌に載せてもいいような小説形式で作品にし、田中もあちこち出版を引き受けるところを当たったが、結局雑誌には出なかつた。もとより、単行本にもならなかつたのである。映画『地球防衛軍』をマンガにした作品が出版されただけである。⁴⁷二回目の『宇宙大戦争』からは、小説形式でなく、原案ということでもストーリーだけを書いた、と丘美は述べている。先の渡辺啓助宛はがきによれば、第二作以降は航空自衛隊岐阜基地(現各務原市)勤務の時期に構想されたことになる。

『地球防衛軍』は、今から五千年前、原水爆戦争によって自らの遊星ミステロイド(火星と木星の間にあつた太陽系第五遊星)を破滅させ、火星に移住した宇宙人ミステリアンが、富士山麓に球形要塞ドームを構築し、地球の土地を占領することを通告する、という話である。田中友幸は製作に当たって、「宇宙人ミステリアンが、誤れる原水爆の利用によって自分たちの遊星を破壊したという設定をとっているが、こういう面からも原水爆実験に対する警鐘の意味を持たせたいと思う」と述べているが、⁴⁸この田中の思いは丘美のそれに共通するものであろう。

ところで、ミステロイドが原水爆戦争によって破滅した、という『地球防衛軍』のストーリーは、火星と木星の間にあつた大遊星(『地球防衛軍』にいうミステロイド)の上に住んだ高等生物が、不用意にも原子力兵器の使用を誤り、木端微塵に粉碎して小惑星になったという「鉛の小函」の構想を流用していることがうかがえる。また、「鉛の小函」には、米ソが原子力戦争をはじめめるのを食い止めるため、火星に棲息する高等生物が地球に移住することを要求しているという作り話をアイゼンドルフ博士が流す場面がある。この「鉛の小函」の挿話は、ミステロイドから火星に移住したミステリアンが、さらに地球の土地を占領して地球に移住することを要求する、という『地球防衛軍』のストーリーに使われている。すなわち、『地球防衛軍』はその構想の上で、「鉛の小函」を原型とする映画と考えていいのである。

また、『妖星ゴラス』は黒色矮星のゴラスが突然太陽系に紛れ込み、地球の軌道と交わっていることから、地球はこのままではゴラスと正面衝突する危機を迎える、という話である。⁽⁴⁹⁾「鉛の小函」には、エロス・アポロ・ヘルメスなど火星軌道より内側にあつて地球に近づく小惑星の話があるが（これは丘美の創作ではない事実の話である）、⁽⁵⁰⁾小惑星と矮星（太陽系外のちっぽけな恒星の違いがあるとはいえ、『妖星ゴラス』のストーリーは「鉛の小函」で述べられた小惑星アポロやヘルメスの事例から発想されたものであろう。すなわち、「鉛の小函」は『妖星ゴラス』の原型としての面も有しているのである。⁽⁵¹⁾

残念ながら東宝SF特撮映画の丘美丈二郎の原作は、活字になつては残らなかつた。しかし、「鉛の小函」は丘美の名を社会に知らしめた東宝SF特撮映画の原型という点でも、丘美の代表作といえるのである。

註

- (1) 中島河太郎『日本推理小説辞典』東京堂出版、一九八五年、五〇頁（「丘美丈二郎」の項）。権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』新潮社、二〇〇〇年、七四―七五頁（山前讓氏執筆「丘美丈二郎」の項）。
- (2) 丘美丈二郎「翡翠荘綺談」ミステリー文学資料館編『別冊宝石』傑作選』光文社文庫、二〇〇三年（初出は『別冊宝石』一九四九年十二月号）。
- (3) 丘美丈二郎「佐門谷」別冊宝石』四卷二号（一四号）、岩谷書店、一九五一年十二月。
- (4) 丘美丈二郎「汽車を招く少女」鮎川哲也編『急行出雲』光文社カッパ・ノベルス、一九七五年（初出は『探偵実話』一九五二年七月号）。
- (5) 鮎川哲也編『急行出雲』（前掲）、一三六頁。
- (6) 丘美丈二郎原作の東宝SF特撮映画『地球防衛軍』をマンガにした作品として、管見の限り次の二作がある。岡本俊彦『地球防衛軍』少年』一九五八年二月号別冊付録（団鉄也・岡本俊彦『海底軍艦 地球防衛軍 東宝映画作品』枚

方映画研究会資料室、一九九七年、として複製。香山滋・原作、小松崎茂・え『モゲラ 東宝映画地球防衛軍』、『おもしろブック』一九五八年二月号ふろく、集英社（小松崎茂は映画『地球防衛軍』の設定デザインも担当した）。前者は原作者名なし。後者は原作者名が丘美ではなく、映画『地球防衛軍』の潤色をした香山滋になっている。これは表題に採られた怪物モゲラは丘美の原作にはなく、香山によってつけ加えられた「潤色」の部分だからである。香山滋原作の東宝SF特撮映画『ゴジラ』を絵物語にした、香山滋・原作、阿部和助・え『科学冒険絵ものがたりゴジラ』（『おもしろブック』一九五四年十一月号ふろく、集英社）が原作者の香山の名前をクレジットしており、香山の著書に数えられることに鑑みるならば、原作者という形でも名前がクレジットされた著書が出なかった丘美は、不遇であったといえよう。ただし、桑田次郎他『ゴジラVSメカゴジラ決戦史』竹書房、一九九三年、に貸本マンガとしてあかしや書房から一九五八年に発行された藤田茂画の『地球防衛軍』の書影が載せられており（筆者は現物未見）、それによればこの本には原作者として丘美丈二郎の名がクレジットされているようである。

- (7) 『地球防衛軍』（出版社名・刊記なし。一九五七年十二月二十八日封切時の映画パンフレット）。「原作・丘見丈二郎」とある。潤色は香山滋。DVD『地球防衛軍』東宝株式会社、二〇〇一年（DVDブックレットでは、原作者名は、「原作・丘美丈二郎」に訂正されている）。木村武脚本によるシナリオは、東宝SF特撮映画シリーズVOL・5『キングコング対ゴジラ／地球防衛軍』東宝株式会社事業部出版商品販促室、一九八六年、所収。なお、東宝特撮映画については、田中友幸監修『東宝特撮映画全史』東宝株式会社出版事業室、一九八三年（本書では、丘美丈二郎は「丘見丈二郎」と誤植）。竹内博編『東宝特撮怪獣映画大鑑』朝日ソノラマ、一九八九年。ヤマダマサミほか『ゴジラ画報 東宝幻想映画半世紀の歩み』竹書房、一九九三年。竹内博監修『全怪獣怪人大事典』下巻、英知出版、二〇〇三年、参照。

- (8) 『宇宙大戦争』外国映画出版社、刊記なし（一九五九年十二月二十六日封切時の映画パンフレット）。「原作・丘美丈二郎」とある。DVD『宇宙大戦争』東宝株式会社、二〇〇四年。

- (9) 『妖星ゴラス』東宝事業部出版課、一九六二年三月二十一日（封切時の映画パンフレット）。「原案・丘美丈二郎」

- とある。DVD『妖星ゴラス』東宝株式会社、二〇〇四年。木村武脚本によるシナリオは、東宝SF特撮映画シリーズVOL・4『海底軍艦／妖星ゴラス／宇宙大怪獣ドゴラ』東宝株式会社事業部出版商品販促室、一九八五年、所収。
- (10) 『宇宙大怪獣ドゴラ』東宝事業部出版課、一九六四年八月十一日(封切時の映画パンフレット)。「原作・丘美丈二郎」「スペース・モンス」より」とある。DVD『宇宙大怪獣ドゴラ』東宝株式会社、二〇〇五年。関沢新一脚本によるシナリオは、東宝SF特撮映画シリーズVOL・4『海底軍艦／妖星ゴラス／宇宙大怪獣ドゴラ』(前掲)、所収。
- (11) 『幻影城』四一号「丘美丈二郎特集」、幻影城、一九七八年三月。
- (12) 横田順彌編『戦後初期日本SFベスト集1』徳間書店トクマ・ノベルズ、一九七八年、は黎明期のSFを集めたアンソロジーであるが、その中に丘美丈二郎「波」が収録されている。
- (13) 栗本薫「27年後のタイム・カプセル―丘美丈二郎論」『幻影城』四一号(前掲)、所収。
- (14) 丘美丈二郎「三角粉」『宝石』六巻二号、岩谷書店、一九五一年二月。
- (15) 丘美丈二郎「耳飾りの女」『宝石』八巻十三号、一九五三年十一月。
- (16) 丘美丈二郎「種馬という男」『宝石』十巻十三号、一九五五年九月。
- (17) 丘美丈二郎「鉛の小箱」『宝石増刊』八巻八号、一九五三年七月。
- (18) 丘美丈二郎「勝部良平のメモ」『別冊宝石』三巻一号(七号)、一九五〇年二月。
- (19) 丘美丈二郎「ヴァイラス」『宝石』六巻十号、一九五一年十月。
- (20) 丘美丈二郎「二十世紀の怪談」『別冊宝石』三巻一号(七号)、一九五〇年二月。
- (21) 丘美丈二郎「空坊主事件」『宝石』九巻六号、一九五四年五月。
- (22) 丘美丈二郎「龍神吼えの怪」『宝石』十巻三号、一九五五年二月。
- (23) 丘美丈二郎「波」『宝石』十一巻十四号、一九五六年十月。
- (24) 丘美丈二郎「パチンコと沈丁花」『別冊宝石』五巻六号(二〇号)、一九五二年六月。
- (25) 丘美丈二郎「ワルドシユタインの呪い」鮎川哲也編『戦慄の十三楽章』講談社文庫、一九八六年(初出は『宝石』

一九五五年七月号)。

(26) 丘美丈二郎「恐怖の石塊」『寶石』七巻六号、一九五二年六月。

(27) 丘美丈二郎「鉛の小函」の頃』『幻影城』四一号(前掲)、所収。

(28) 丘美丈二郎インタビュー「私の作品はSF(サイエンティック・フィクション)じゃなく、SS(サイエンティック・ストーリー)です!」東宝SF特撮映画シリーズVOL・5『キングコング対ゴジラ/地球防衛軍』(前掲)。

(29) 碓義朗『幻の戦闘機 「零戦」後の陸海軍機の開発秘録』サンケイ出版(世界大戦文庫スペシャル)、一九八六年、「時速八〇〇キロに挑戦した「震電」」。本書の元版である、碓義朗『幻の戦闘機 秋水、火龍、烈風、震電：開発の記録』サンケイ出版(第二次世界大戦ブックス)、一九八〇年、の当該部分では、兼弘正厚に関する記述はない。世界大戦文庫スペシャル版における加筆部分である(のち光人社から再刊された、碓義朗『幻の戦闘機 「零戦」後の陸海軍機の開発秘録』光人社NF文庫、二〇〇三年新装版、は世界大戦文庫スペシャル版「開発秘録」と同一の内容である)。碓と兼弘は軍事雑誌『丸』の執筆者仲間であり、兼弘に関する記述は、元版刊行後、兼弘への取材によって加筆された可能性が高い。兼弘は『丸』に飛行機エッセイを、一九六八―一九六九年の長期にわたり断続的に寄稿している。一例をあげておけば、兼弘正厚「ヒコキ発達うらばな史」『丸』三九巻五号(四七八号)、潮書房、一九八六年五月。同「飛行機は空飛ぶ自動車」『丸』四〇巻五号(四九〇号)、一九八七年五月。同「ヒコキ&流体力学読本」『丸』四二巻五号(五一四号)、一九八九年五月。すなわち、丘美名義による探偵・SF小説を発表しなくなったのち、横田順彌氏が『戦後初期日本SFベスト集1』(一九七八年)の「解説」で「現在は沈黙」と述べた時期の丘美は、一九六八年に航空自衛隊も退職し、本名の兼弘正厚名義で飛行機技術者として『丸』に健筆を振るっていたのである。

(30) 『宮崎駿監督作品 風立ちぬ』東宝(株)出版・商品事業室、二〇一三年七月二十日(封切時の映画パンフレット)。

宮崎駿・半藤一利「『風立ちぬ』戦争と日本人」『文藝春秋』二〇一三年八月号(九一巻九号)、文藝春秋。スタジオジブリ監修『風立ちぬビジュアルガイド』角川書店、二〇一三年七月。

(31) 堀越二郎『零戦 その誕生と栄光の記録』角川文庫、二〇一二年。堀越二郎は一九二七年三月に東京帝国大学工学

- 部航空学科を卒業し、同年四月に三菱内燃機株式会社(のちの三菱重工)の名古屋航空機製作所に入社している。
- (32) 兼弘正厚「ものすごい探求心を秘めたジェントルマン」『化学』三七巻一号「特集・ノーベル化学賞受賞者福井謙一博士―その人と業績」、化学同人、一九八二年一月。
- (33) 丘美丈二郎「『探偵趣味』に寄せて」『探偵趣味』十一号(二巻二号)、探偵小説趣味の会、一九五三年十月。
- (34) 丘美丈二郎「探小に於けるセクシヨナリズムと立場の調整統一」『密室』二〇号、S・Rの会、一九五六年四月。
- (35) 丘美丈二郎「論文派の誕生」『宝石』七巻一号、一九五二年一月。
- (36) 丘美丈二郎「探偵小説と政治屋」『密室』二巻三号(八号)、関西鬼クラブ、一九五三年六月。
- (37) 丘美丈二郎「S・Fの二つの行き方」『宝石』十一巻八号、一九五六年六月。
- (38) 永瀬三吾「売国奴」春陽文庫、一九五七年。同『白眼鬼』同光出版、一九五八年、が著書としてある探偵作家。
- (39) 野尻抱影「星座の話」偕成社、一九五七年、三一七―三一九頁。同『天体と宇宙』偕成社、一九六二年、一三八―一四四頁。
- (40) 『アサヒグラフ』一九五二年八月六日号(五六巻三三三号通巻一四六〇号)「原爆被害の初公開」、朝日新聞社。
- (41) 松本清張『風の息』上、朝日新聞社、一九七四年、一七頁参照。
- (42) 日本文学全集84『埴谷雄高・堀田善衛集』集英社、一九六八年。堀田善衛『広場の孤独・ゴヤ(黒い絵)』について『新潮社(新潮現代文学29)、一九八〇年、所収。
- (43) 中村真一郎・福永武彦・堀田善衛『発光妖精とモスラ』筑摩書房、一九九四年(『週刊朝日・別冊』一九六一年一月号に発表されたこの『モスラ』原作は、本書ではじめて単行本化された)。本多猪四郎監督『モスラ』東宝株式会社(DVD)、二〇〇三年。
- (44) 筆者架蔵。本書簡は半世紀前のものであり、当該住所表示も現行のものとは異なる。丘美は故人であり、自衛隊退職後、鮎川哲也が『急行出雲』に「汽車を招く少女」を再録するために連絡を取った一九七五年の時点で、すでに藤沢市に転居していた(鮎川哲也編『急行出雲』前掲、一三七頁)。以上のことから、住所を翻刻しても個人情報への侵

害にはならないと判断し、文面どおり翻刻することにした。

(45) 『地球防衛軍』（前掲、一九五七年十二月二十八日封切時の映画パンフレット）。

(46) 渡辺啓助『ネメクモア』東京創元社、二〇〇一年、の「渡辺啓助年譜」（奥木幹男氏執筆）によれば、渡辺啓助は一九五七年十月に、自身がリーダー的立場となって科学小説関係の「おめがクラブ」を結成し、機関誌として『科学小説』を発刊している。編集委員には丘美丈二郎も参加している。このはがきに見出せる渡辺が丘美に送金した「原稿料」とは、時期的に見て『科学小説』のものであるうか。渡辺は幻想的な作風の探偵作家であるが、一九五八年九月にドキュメンタリー『海・陸・空のなぞ』を発刊するなど（渡辺啓助『海・陸・空のなぞ』新潮社、一九五八年）、この時期は最もSFに接近した。

(47) 前掲注（6）参照。

(48) 『地球防衛軍』（前掲、一九五七年十二月二十八日封切時の映画パンフレット）。

(49) 『妖星ゴラス』（前掲、一九六二年三月二十一日封切時の映画パンフレット）参照。

(50) 野尻抱影『天体と宇宙』（前掲）、一四三―一四四頁参照。

(51) 『地球防衛軍』『妖星ゴラス』は、モロー彗星が地球と正面衝突するであろう危機の中で、火星人が地球へ攻めてくるという海野十三『火星兵团』（一九四一年）の意匠をも引き継いでいるといえよう。海野十三傑作集Ⅲ『火星兵团全』桃源社、一九七〇年。